

## 横超慧日先生

——中国仏教研究における偉功を追慕して——

木村宣彰

想い返せば、先生に始めてお会いしたのは昭和三十九年の春であつた。研究室をお訪ねしたとき、先生は壁に貼つた大きな中国の地図を背にして金陵刻経処から刊行された仏典に朱引きをされていた。当時、大谷大学では三回生になつて学科と専攻を決定することになつており、私は先生の指導を仰ぎ、中国仏教を専攻しようと考えて研究室に伺つたのである。はじめて警咳に接したとき、先生はいつもながら穏やかな慈愛に満ちたお話ぶりであつたが、周りには凜とした雰囲気があったよつており、学部の一学生が教授にお会いしたときのあの緊張感を今も忘れることができない。

爾來、三十有余年に互り、先生から学問のほどきはもとより人生の万端に互つてご教導を忝なくした。永年に互つて学と徳を兼備された先生から仏教の「いろは」を学び、親しく薰陶を受けることができたことは本当に幸運であつた。不肖の弟子であることを慚愧しつつ、先生の事績の一端を述べ、中国仏教研究における偉大な功績を追慕したいと思ふ次第である。

横超慧日先生は、明治三十九（一九〇六）年二月二十一日、愛知県丹羽郡千秋村浮野にある真宗大谷派願行寺住職の横超日南と要の二男として生まれられた。地元の千秋第二尋常小学校、名古屋の尾張中学から第八高等学校文科乙類を経て、昭和四年に東京帝国大学文学部印度哲学科に入学された。東京大学では高楠順次郎・木村泰賢・宇井伯寿・島地大等・加藤精神をはじめとして錚々たる諸教授の薫陶を受けられた。高楠順次郎の梵語の授業、木村泰賢の感銘深い講義の思い出をよく語っておられたが、最も熱をこめて述懐されるのは何時も指導教授であった常盤大定の研究と教育のことであった。中国仏教の研究において絶大な功績を挙げられ、その大成者ともいうべき常盤大定は、先生にとって終生の師であり最も深い感化を受けられた。先生は常盤大定の学問は勿論のこと、趣味の囲碁や好物の大福餅にいたるまでよくご存じであった。大谷大学における毎年度の講義では、最初には先ず黒板の中央に「常盤大定」と大書し、続けて本学第四代学長でもあった村上专精や高楠順次郎、木村泰賢、宇井伯寿などのお名前を記し、最後には必ず常盤大定の中国仏教研究における功績を縷々話されるのであった。晩年を過ごされた滋賀県大津のご自宅の居間には榴邸の揮毫になる「横超」の扁額を掛けておられた。榴邸は常盤大定の雅号である。この「横超」の書は同門の畏友結城令聞から贈られたものであるが、その扁額を見ながら「常盤先生は……」「常盤先生は……」と繰り返し、師の学恩を語りつつ往時を懐かしんでおられたお姿を今も忘れることができない。

先生は中国仏教の研究の大道をまっしぐらに進まれ数々の業績を得られたが、意外にも東京帝国大学における卒業論文のテーマは日本天台の祖最澄の名著『顕戒論』の研究であった。真宗寺院のご出身である先生は、当初は宗祖親鸞を中心に鎌倉仏教の思想的解明を志しておられた。指導教授の常盤大定は、周知の如く中国仏教研究の大家であったが『日本仏教の研究』の著書もあり、わが国の仏教についても造詣が深かった。しかし常盤大定は鎌倉仏教の研究

を志す先生のために、特に東大史料編纂所の鷲尾順敬を紹介し、その教示を受けるように指導された。かくして鷲尾順敬の指導もあって鎌倉仏教の母胎であり、日本仏教の基盤を作った最澄の研究にとりかかれたのである。卒業論文のテーマとして最澄の『顕戒論』を選び、その完成に邁進された。卒業論文の作成に際しては天台学の権威者であった福田堯頼・塩入亮忠のお宅をしばしば訪問され、数々の教示を仰ぎ万全を期された。卒業論文は惜しくも戦災で失われたが、その成果を卒業の年に權威ある学会誌『宗教研究』に「円頓戒について」と題して発表し、卒業論文の作成を通じて得た新たな知見を学界に問われたのである。これが先生の最初の学術論文であった。

昭和三年三月に東京帝国大学文学部を卒業し、四月には同大学院に進学された。大学院に進学されると同時に聖徳太子奉賛会の研究員に推挙され、本格的に学究生活を開始される。

この頃に北京や上海の功德林仏経流通処を通じて盛んに金陵刻経処の仏書を購入された。先生が生涯に互って愛読された金陵刻経処刊行の仏書は、この時代に揃えられたものである。金陵刻経処は、楊仁山がかつてロンドン留学中に親好のあった本学第二代の学長であった南条文雄の協力を得て南京で仏典の出版及び流通を目指して創立したものである。

聖徳太子奉賛会の研究員に選ばれた頃、先生は未だ独身で家庭をもっておられなかったこともあって研究費の殆どを金陵刻経処の刊本の購入資金に充てられた。後年、先生はそのことを述懐しながら「あの当時、日本で中国刊本の恩恵を蒙ること最も大きかった者の一人である」と語っておられた。その当時の仏教流通処の販売目録を晩年に至るまで大切に保管されておられたが、それはよほど金陵刻経処の仏典に愛着があつたからであろう。研究を志す者にとって必要な書物を揃えることは先ず以て為すべきことであるが、先生は着実に研究者にとって必要な条件を整えておられたのである。

常に座右に在った金陵刻経処の仏典にはいずれも丁寧な「朱引き」が施されており、巻末には必ず「某年某月某日、

某所において読了」と読み了えられた月日が若干の所感とともに記入されていた。巻末に記された読了の日付はどの本もみな数行に及んでおり、繰り返し繰り返し何度か精読し味読されたことを如実に示していた。その余白には、要点、問題点などが小見出しのように朱墨で記され、また時には読書を通じて得た様々な所感なども仔細に書かれていた。それを見せていただいたとき、読書とはかくなるものかと強い感銘を受け、同時に学者はこれほどまでに書物を精読しなければならないのかと忸怩たる思いにかられた。筆者が最初に先生の研究室をお訪ねしたとき、朱引きされていた刊本は、この頃に求められた金陵刻経処の仏典であった。

晩年、先生のお宅で或る疑問についてお尋ねしたとき、先生は奥からあの刊本を出してこれ一緒に読んでいたことがあった。その折にも新たな発見があると直ぐに「ちよつと待って下さい。朱を入れますから」と言いつつ手元の朱墨を摺られるのであった。このような朱点を施しながらの先生の読書法はついに晩年にいたるまで変わることはなかった。

## 二

昭和六年、恰も常盤教授の定年退官に合わせるように大学院を満期退学されて、翌年から外務省所管であった東方文化学院東京研究所の助手となり、まもなく研究員に就かれた。中国文化の研究発揚を目的とする東方文化学院は、当時、服部宇之吉が院長であった。服部宇之吉は「彼の地を踏まずして中国を研究するのは雲煙を隔てて廬山を望むが如くである」との考えから中国研究には実地踏査が不可欠であるとして昭和九年に若干の所員を選抜し中国に派遣された。中国仏教を専攻された先生は、中国法制史の仁田井陘、歴史地理学の青山定雄ら各分野の専門学者七名と共に選ばれて河北・山東・山西の各地を調査旅行し、中国の自然に親しみ、中国の学者と交わり、資料の蒐集につとめられた。帰国後、ただちにその成果を「新出金版藏経を見て」と題する論文にまとめて発表された。

そのうち不幸な日中関係のため、先生に中国旅行の機会は与えられなかったが、昭和五十一年に日本仏教各宗派の代表者によって結成された日中仏教友好訪中団に真宗大谷派を代表して参加され、四十余年振りに中国の地を踏まれた。更に昭和五十九年・六十年・六十一年に門下生や友人とともに中国旅行を楽しまれた。筆者はそれに同行させていただき先生から中国において実地に指導を仰ぐことができたのは誠に幸いであった。その旅行期間中、先生は実に丹念にメモをとりながら、折に触れ、昭和九年の旅行を思い出しながら往時の中国調査旅行のことを懐かしんでおられた姿を今も忘れることができない。

先生は昭和七年から二十四年まで研究者として最も大切な時期である二十代後半から三十代の全時期を外務省所管の東方文化学院東京研究所（昭和二十三年に東京大学東洋文化研究所に改組）で研究一途の生活を送られた。その間に陸続と研究成果を発表され学界を裨益されたことは改めていうまでもないことであるが、その中で特筆すべきは、昭和十四年に先生三十四歳のとき、三論宗の開祖吉蔵の『法華義疏』十二巻を国訳し、詳細な訳注と解題を付して『国訳一切経』として学界に提供されたことである。これは中国法華思想史の研究をを目指す者が必ず目を通す労作であり、その解説は今日もなお多くの学者が論文に引用する画期的なものであった。

因みに先生は昭和十四年に小島常次郎の長女多祐子と結婚されたが、恰もその年を記念するかの如くに最初の著書である『国訳一切経』を出版されたのである。

更にその三年後の昭和十七年、三十七歳の時に日本評論社の「東洋思想叢書」の一として武者小路実篤の『維摩経』などとともに『涅槃経』を上梓された。この『涅槃経』は、そのうち暫くの間、版が途絶えていたが、江湖の強い要請で昭和五十六年に京都の平楽寺書店から再刊され、広く学界を裨益しつづけている。本書は三十代に著された労作であるが、今に至るもなお『涅槃経』のほぼ唯一の研究書として高い評価を得ている。後述するように大乘經典の『涅槃経』と『法華経』とは先生にとって終生の研究課題であり、このほかにも数々の著作を上梓されたことは周

知の通りである。

若き日、東方文化学院東京研究所の時代に発表された論文の一一について紹介する暇はないが、特に『東方学报』誌上に発表された「法華經の一乘思想と仏伝」「中国仏教に於ける国家意識」「中国仏教に於ける大乘思想の興起」「僧叡と慧叡は同人なり」などの雄辯は後学にとって甚だ有益な論考である。いずれの論文も緻密な文献的な考証がなされていることはもちろんであるが、広い視野に立ち思想的に総合的な解明を目指した論考であった。僧叡に関する論文などは、学界において看過されていた重要な課題に光りを当てた研究であり、先生の研究における着眼の鋭さを示すものであった。

昭和十二年に「支那仏教史学会」が結成され、日本における中国仏教の本格的な研究が開始された。それ以前の中国仏教の研究は、おおむね各宗の宗学を補完する余乗として研究される傾向にあったが、先生はそれから脱皮し近代科学的な解明を目指す同学の研究者と共に本会の創立メンバーとして中国仏教研究に新生面を開かれた。その頃、東京で研究生活を送っておられた先生は、志を同じくする東京の福井康順・結城令聞・板野長八・山崎宏と京都の塚本善隆・高雄義賢・野上俊静・諏訪義讓・道端良秀・小笠原宣秀らの諸氏と共に「支那仏教史学会」の会員として年に四回刊行する会誌『支那仏教史学』に意欲的な論考を発表された。この研究誌は戦争のため昭和十九年十月に止むなく休刊することになるが、その間に発表された「釈經史考」「戒壇について」などの論文はいずれも学界に新たな問題を提起するものであった。中国仏教における經典解釈法を論じた「釈經史考」の考究について先生は「贊寧の『僧史略』を読んでいて気づいたんだよ。学者は何よりも目の付けどころが大切ですよ。着眼点が良くないといくら論文を書いても調査報告になってしまふ」と語っておられた。思想的解明を目指しておられた先生が中国における「戒壇」の成立を論じられたことは、先生の学問が偏狭なものでなく常に広い視野に立って中国仏教の解明を目指すものであったことを物語っている。

昭和十七年の二月に常盤大定が主催して「日本仏教学院」が設立された。本会は時代思潮を反映してわが国の仏教思想を研究することを主目的とするものであった。院長の常盤大定は「幅広く奥深く、而も識見あり、気概あり、情熱ある人材」を研究員に選任された。そこで既に東方文化学院の研究員であった先生は、選ばれて本院の研究員をも兼ねることになった。そこでの研究成果は「仏教に於ける宗教的自覚―機思想の歴史的研究―」と題する論文にまとめられ、紀要『仏学論叢』の発刊に際して巻頭を飾ることになった。この論文に見られるように先生の研究は、単に教理の展開を一面的に考察するものではなく教えを受ける衆生の宗教的自覚にも多大の関心を払われていた。しかもその考察は他の論文もそうであるように思想的に鋭く事柄の本質を剔るものであった。しかも、このような「機の自覚」に関する関心は、後に親鸞や浄土教の研究において更に徹底されることになる。

### 三

官立の東方文化学院の研究員でありながら、既にこの頃に様々な形で真宗大谷派との関わりを結んでおられた。その一二の例を挙げれば、当時、東京に学ぶ大谷派出身の学生のために白山に「真心寮」という学寮が用意されており、先生はその寮監を勤められた。この学寮は昭和二十一年に戦災のために焼失したが、先生は「僕の寮監の時に焼失した」と言ってから後年まで強く責任を感じておられた。これは一寮監の努力では如何ともなすがたい不可避の災難であったが、先生は教育・研究に関する責任感に勿論のことであったが、何事に関しても自らが引き受けた職務に強い責任を感じておられた。

昭和十九年の夏安居本講において常盤大定は『諸経和讃』を講じ、先生が都講をつとめられた。なお次講は山口益であったが、希しき因縁で昭和三十七年の安居では山口益が本講に当たり、先生は次講をつとめ『妙法蓮華経』を講じられた。

その折の講本が後に『法華經序説』として京都・法蔵館から公刊されたのである。本書には先生が自ら作られた索引が付されているが、それは索引とはかくあれかしとの範となるものである。この索引は『法華經』の要項を条目として示し、初心者でも容易に『法華經』の思想内容が鳥瞰できるように配慮されており利用した者は誰しもが重宝するものである。このような索引は長年に亙り『法華經』を精読し、その真義に通じた学者のみが為し得るところである。昨今、コンピューターによる用語の検索が盛んであるが、進取の気性に富み、新しい時代の仏教学を模索されていた先生には必ずやこの風潮に対しても一家言があつたことと思われるが、今やそれを聞けないのは誠に残念なことである。

太平洋戦争の戦局がいよいよ苛酷となつた昭和二十年は、先生にとつてもまさに苦難の時期であつた。先生が敬慕して止まない終生の師・常盤大定が二月に東京から仙台に帰郷し五月五日に逝去された。また、この頃、先生の研究活動の中心であつた東方文化学院にも戦火が及ぶようになつた。やむなくその蔵書を東京から地方に移さざるを得なくなり、長野県小県郡に分室を設けて疎開することになつた。先生は疎開の責任者として蔵書を長野に移し、やがて開設された分室の主任に就かれた。そのため家族と共に居を長野に移し、翌二十一年の十一月に東京に戻るまでの間、長野で研究生活を送られた。疎開先の長野での生活は短期間であつたが、土地の青年達と交流し勉強会なども行われたようである。苦しい時代を共に生きた人々との付き合いは晩年に至るまで続いた。

終戦をむかえ、昭和二十三年に外務省の所管であつた東方文化学院が解散し、東京大学の東洋文化研究所に改組されると同時にその研究員となり、東京での研究生活を再開された。

#### 四

戦後、新制の学制が施行されるとともに全国の各大学は再出発に際して優れた教官を求めていた。東西の大学から



招聘を受けていた先生は、東京のある著名な大学の教員適正審査に合格し既に教授の職が決まっていたが、大谷大学長の藤岡了淳をはじめ諸氏の懇請を受け入れて昭和二十四年にわが大谷大学に赴任されたのである。それに伴って居る京都洛西の鳴滝泉谷町の西寿寺極楽庵に移された。時に先生は学者として最円熟の四十四歳であった。

爾来、四十年に垂なるとする間、孜孜として大谷大学において教育と研究に尽くされたのである。その間の業績は、いづれも中国仏教の思想史的解明を目指すものであったが、研究の領域はいよいよ拡大していった。大谷大学の教授に着任されてから以降に「親鸞聖人の読経観」「浄土教の兼為聖人説」「願生者としての凡夫と聖人」「曇鸞」「中国浄土教と涅槃経」「仏性論上から見た親鸞の位置」など浄土教や親鸞に関する論考を陸續として発表された。

大谷大学教授としての先生は研究の領域を拡大されるとともに恰も川の流れの源を尋ねるように研究が徐々に中国仏教の初期へと遡及していった。大谷大学に着任されて最初の論文は、中国近代における仏教と基督教について考察した「明末仏教と基督教の相互批判」(昭和二十四年)であったが、引き続いて発表された論文に「中国南北朝時代の仏教学風」(同二十六年)・「竺道生撰法華経義疏の研究」(同二十七年)・「南岳慧思の法華三昧」(同二十九年)・「中国仏教の翻訳論」(同三十年)・「涅槃無名論とその背景」(同三十年)・「初期中国仏教者の禪観の実態」(同三十一年)・「釈道安の翻訳論」(同三十二年)・「鳩摩羅什の翻訳」(同三十三年)・「魏晋時代の般若思想」(同三十五年)・「教相判釈の原始形態」(同三十六年)・「大乘大義章研究序説」(同三十七年)などがある。これらの論考によって先生の関心が次第に中国仏教の初期へ遡及していったことが知られる。

昭和三十三年一月には、学位請求論文として執筆された「広律伝来以前の中国に於ける戒律」を収めた『中国仏教の研究』を京都・法蔵館から出版し、当該の論文によって同六月に文学博士の学位が授与された。学位論文は中国仏教の礎を築いた釈道安を中心として四大広律が伝来する以前の戒律の実態を説明するものであった。この領域の研究は、資料が甚だ乏しく、従来の中国仏教の研究において全く未開拓のままに放置されていた重要な課題を解明した画

期的なものであった。

生前に直に学位論文について詳しくお聞きする機会に恵まれなかったが、恐らくは、かつて卒業論文執筆の頃に『顕戒論』の研究を通して抱いておられた真摯な志を貫徹され、遂にここに至って結実をみたのではなからうか。筆者にはそのように思われてならない。現に先生は『仏教学の道しるべ』の中で卒業論文を書こうとする学生に「若し学者として身を立てることになれば、その卒論題目選定の第一歩が、大きくその人の学問を性格づけることになるから、そう考えてみれば出発点は極めて重大だということになる」と語っておられるのである。

## 五

先生は阿羅漢のように孤高に研究のみに専念されたわけではなく、情熱を傾けて教育に尽力された。後年、先生は研究のみを専らとする東京の研究所から京都の大谷大学に移られた当時を回顧して「研究だけでは駄目ですよ。やはり教えることによって研究が確かめられるんだから」とよく語っておられた。実際に教壇にたれた先生は最新の研究成果を問題の所在から説きはじめ、結論に導く課程を平易に解き明かされていた。警咳に接することができた学生は等しくその学恩に浴したのである。

昭和四十年代のことであつたと思うが、先生は時間を割いて課外に一乗仏教研究会と称する会を催された。そこでゼミの学生は学会誌に掲載された最新論文を読んで概要を発表したり、長安や洛陽あるいは廬山や天台山などの仏教史跡を調べて報告し合ったものである。それに対して先生は懇切に講評を加え、歴史地理にも配慮し出来るだけ広い視野をもって勉学するように指導された。このような若い学生にたいする先生の真摯な教育姿勢の一端は『仏教学セミナー』に掲載された「中国仏教の道しるべ」「中国仏教研究法私見―特に初歩の学生諸君のために―」「仏教学徒の反省」などによって如実に窺うことができる。今となれば、これらの遺文は中国仏教の研究を目指す後学のための最

も確かな指針となつてゐる。

教育に対する先生の情熱は、本務校の大谷大学だけに留まるものではなかつた。京都大学人文科学研究所（昭和三十九年・四十年）・九州大学（同四十年）・京都大学（同四十二年）・京都大学大学院（同四十三年）・愛知学院大学（同四十八年）などに非常勤講師として出講され、全国の大学や研究機関で中国仏教を講じられた。恐らく、そこでも懇切な指導に当たられたことは想像に難くない。

大谷大学教授の在任中の功績として忘れてならないのは『仏教学序説』『仏教学辞典』の執筆である。大谷大学における同僚教授の山口益・舟橋一哉・安藤俊雄と共に『仏教学序説』を著し、また多屋頼俊・舟橋一哉と共に『仏教学辞典』の編集を担当された。当時、大谷大学に学ぶ学生は『仏教学序説』によつて仏教の大綱を学び、『仏教学辞典』を仏典講読の手引きとしていたのである。また山口益の監修になる『仏教聖典』ではとりわけ造詣の深かつた『法華経』『涅槃経』の現代語訳を担当され、大乘経典を一般読書人に開放しようといふとされた。また先生が著された『仏教とは何か』などは、深い学殖に裏打ちされた奥深い内容であるにも拘わらず平易な表現で仏教の教えを解き明かしている。これは先生の研究と教育の姿勢を端的に示すものであつた。

## 六

大谷大学において先生は学生部長や学監兼文学部長などの要職を勤められた。殊に文学部長に就任された時期は、学生が大学改革を要求し大学全体が混乱の最中であつた。その中で先生は常々自ら述懐されていたように必ずしも行政的手腕に長けておられたわけではなかつたが、その人柄から篤実に職務に当たられた。

昭和四十六年春に六十五歳で定年を迎えられたが、引きつづき七十歳まで教授として後学の教育に尽力された。永年の功績により昭和五十一年四月に名誉教授の称号が授与された。その後も八十余歳まで大学院において『弘明集』

『出三藏記集』『法華玄義』などの文献研究を担当し、後進の指導に情熱を傾けられた。

定年によって大谷大学の教授を退いてからは、真宗大谷派の教学研究所の副所長をはじめとして、和宗総本山四天王寺の勸学院講師、華嚴宗総本山東大寺の勸学院講師、天台宗の叡山学院講師などを勤め、文字通り南都・北嶺の諸大寺に活躍の場を広げられた。殊に四天王寺では最晩年に至るまで一般聴衆に「主要な大乘經典」と題して毎月定例の講義を担当された。その間に四天王寺勸学院において『四天王寺本・三経義疏』全六冊の校訂出版に尽力されている。大学における研究・教育に加えて仏教教化の活動に尽瘁されたのである。

昭和五十五年に真宗大谷派における教学の最高の責任を負う講師の学階を授けられた。更に同六十年には大谷派薫理院薫理に任ぜられ、真宗大谷派における教学の重責を担われた。就中、昭和五十八年には、真宗大谷派の夏安居において本講の講師をつとめ『教行信証』の「信卷」を講述された。安居本講において講本『顕浄土真実信文類』を執筆されると共に、この機縁を得て『涅槃経と浄土教』を刊行された。本書には「仏の願力と成仏の信」という副題が付されている。筆者の手元にある先生自筆メモによると、本書の書名は迷うことなく即座に『涅槃経と浄土教』に決定されたが、副題についてはいくつもの案をあげられた。即ち「浄土教の源流を尋ねて」「仏の本願力について」「把握源」「願力往生の源流を尋ねて」「願力往生の源を探る」「浄土信仰の源流をさぐる」などである。当初、先生は「願力往生の源流を尋ねて」を第一案とし、「浄土教の源流を尋ねて」を第二案として考えておられた。結局、上記のように決定したが、このことよって本書に寄せる先生の願いが那邊にあったかを十分に窺い知ることができる。この「源流を尋ねたい」という願いこそが生涯を一貫する学問における基本的姿勢であった。本書を書評された柳田聖山教授が『涅槃経と浄土教』を「横超仏教学の出世本懐」と評された所以である。

中国仏教研究の大道を歩まれた先生の学究生活は、若き日の卒業論文から始まった。先生は「私の研究は一乘三乗の問題であった」と語っておられたが、この問題はとりもなおさず卒業論文で扱った最澄の抱いていた課題であり、

この解明のために先生の研究は「源流を尋ねて」日本から中国へ、更に初期の中国仏教研究へと徐々に遡及していったのである。先生が「長生きしたら印度仏教の研究にまで進むかもしれない」と笑いながら語っておられたことを思い出すのである。

## 七

思うに、先生は研究から教育へ、更に教化へと仏教者として理想的な一生を歩まれた。東京の研究所で過ごされた二十代から四十代前半は謹厳な学徒としての研究時代であり、次いで大谷大学教授として過ごされた四十代後半から六十代後半までは研究と共に教育に尽力された時代である。そして晩年は、研究・教育に加えて教化に尽くされた時代である。研究から教育へ、そして教化へと徐々に先生は生き方を深化されたのである。

しかし研究を第一義として常に着実な学徒生活を堅持されていたことは、定年の後も次々に高著を刊行し学界を裨益されたことによつて知られる。即ち、その一端をあげれば『中国仏教の研究・第二』『中国仏教の研究・第三』『法華思想』『法華思想の研究』『法華思想の研究・第二』『北魏仏教の研究』『国訳一切経』『羅什』（共著）『元暉撰二障義』（共著）『涅槃経と浄土教』などである。なお『法華思想』は先生の還暦を記念するものであるが、単に寄稿論文の数を誇るような論文集ではなく自らの学問の集大成としたとの願いから先生自身が編集されたものである。先生の面目躍如たるものがある。

先生は東京の大蔵会に関係されたこともあって仏教書誌に詳しく新出資料の紹介に努められた。例えば、東大寺寿靈の『華嚴略指事』をはじめ、慧均の『大乘四論玄義』や元暉の『二障義』など未だ学界に知られていなかった貴重な資料を発見し学界に提供された。これらは仏教の思想史的解明を目指しながら書誌に通じた先生の忘れてはならない功績の一である。

学会においても日本仏教学会の理事、印度学仏教学会の評議員、道教学会の評議員などを歴任された。このような数々の功績、殊に中国仏教研究における学勲によって昭和四十七年には紫綬褒章を、同五十三年には勲三等瑞宝章を受章された。更に昭和五十九年には仏教伝道文化賞を受賞されたのである。

## 八

先生のお人柄を物語る多くの逸話がある。先生は何事につけても大変に几帳面にメモを取られたので「メモ魔」の称があり、それにまつわる幾つものエピソードがある。また先生の依頼で常盤大定の自坊を仙台に訪ね、その報告に伺った折に仙台出身の土井晚翠の話になり「私は島崎藤村の女々しい詩よりも晚翠の男性的な詩が好きだ」と語られ「五丈原」を吟じられたこと等等、思い出す事がらは多いが、それらを記す紙幅はない。

先生の講演は機知に富むものであった。かつて奈良の地で「仏教と人間の生き方」と題して講演されたが、はじめに自己紹介されて、次のように語られた。

年だけは八十三歳です。やっと三歳です。「やっと」というのは、「八」を「十」寄せ「三歳」を加えただけです。まだ若いのです。私の実家は愛知県の一宮ですが、今は大津に住んでいます。そこで「お前も老人会に入らないか」といわれました。しかし「やっと三歳では、まだ子供だから入らない」といつて老人会に入っていません（笑い）。

いつもお元気でしかも前向きな生き方をされた先生が、それから僅かに数年のち「やっと九歳」で帰浄されるとは夢にも思わなかった。

思い返せば、先師常盤大定の学問を継承し、当に為すべき事を為し、語るべきことを語り、学者として、教育者として、そして仏教者として、実に充実したご一生であったことに深い感銘を覚える。

いま恩師を喪い、改めて離愁の想い転た切なるものがある。

横超慧日博士 大谷大学名誉教授。真宗大谷派講師。

平成八年一月十七日、午後五時二十分、腎不全のため寂。世寿八十九。

葬儀は同年一月十九日、大津シテイーホールにおいて長女古田路子が喪主となり、大谷大学名誉教授佐々木教悟師を導師として営まれた。

法名は常楽院积慧日。墓所は京都東山の大谷本廟である。